

本会は会員相互の親睦を図り、母校の教育の振興に寄与することを目的とする。

(同窓会規約第3条)

中女女女中高
雲家実高併八

同窓会会報

発行所／〒049-3111
北海道二海郡八雲町住初町88
北海道八雲高等学校 同窓会
TEL(0137)63-2105 FAX(0137)63-2106
会長 小林 信雄
編集委員長／副会長 小林 石男
編集委員／組織・広報部理事
印刷所／(有)三和印刷
〒040-0061
北海道函館市海岸町8-11
TEL(0138)45-0845 FAX(0138)43-3594

多くの皆様に感謝とお礼の言葉



北海道八雲高等学校 創立百周年記念協賛会
会長 小林 信雄

同窓生はじめ、関係者の皆様には新しい年を迎えられ、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。一月一日に発生した「能登半島地震」で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。そして一日も早い復興を願っております。さて我々の母校である北海道八雲高等学校が創立百周年を迎え令和五年十月十五日その記念式典並びに祝賀会が多くの関係者の出席をいただき盛大に開催され無事終了する事が出来ました事は八雲町はじめ、同窓生の皆様、町内企業の方々、又関係者の皆様、地域の皆様等々、多くの皆様の暖かいご支援とご協力の賜であり衷心より厚くお礼と感謝を申し上げます。

この大きな百周年という節目を迎えるにあたり、三年前より準備にかかり、同窓生、教職員、PTAが中心になり、創立百周年記念事業協賛会を立ち上げ計画、実行に至りました。

時を同じくして、三年前、世界の人々を震撼させた新型コロナウイルスの感染拡大で社会が大困難な時にもかかわらず、多くの皆様方の深いご理解とご支援に大変嬉しくあらためて心よりお礼申し上げます。

歴史は後世につないで行かなければならない大切な預かりものであります。その為に、十年刻みの節目、節目に記念式典や記念行事を行って参りました。特に、今回は百周年と言う事もあり協賛

会としても、今までより多くの記念事業を計画させて頂いていただきました。主な事業を列記しますと、記念式典、祝賀会はじめ、校史資料館、記念石碑の建立、記念讃歌の作成、記念誌の発行、記念講演、そして部活動への助成、人材育成プログラム等数多くの計画を立てました。中でも大きな目玉事業は来年度より実施を予定している生徒たちの短期海外研修であります。研修成果をあげて生徒達が将来社会に出て大活躍する事を期待しているところでもあります。

現在、教育においても少子化と共に個性の重視と心の豊かさが求められております。この様にして迎えた百周年も八雲高等学校の未来への一通過点であり、私たちは先人の偉業を継承し、その足跡を見失う事なく、明日を拓く次世代へ歴史と伝統を伝える責任があります。その意味からも記念石碑には卒業生が贈ってくださいました『情熱百年はばたけ未来へ』を記念石碑文として刻まさせていただきます。

この事業推進にあたり多くの皆様のご協力に心から感謝とお礼を申し上げますと共にこれからの母校八雲高等学校の教育振興に深いご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。

終わりになりますが皆様のこれからの益々のご活躍とご健勝をご祈念申し上げます。

同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。まずは令和6年1月1日に発生いたしました「能登半島地震」にて被害に遭われた皆様に心からお見舞い申し上げます。被害がこれ以上拡大しませんように、そして皆様が一日も早く平穏な日常に戻れますように心よりお祈りしております。



北海道八雲高等学校長
高橋 一矢

情熱百年、はばたけ未来へ！ ～チーム八高・オール八高で～



間でした。在校生たちはあの景色を生涯忘れることはないでしょう。この奇跡はひとえに、平素よりご尽力いただいております創立百周年記念事業協賛会(同窓会長)小林会長のはじめ、関係役員の皆様、多くの同窓生やPTA役員、さらには地域の皆様の多大なるご協力の賜物と厚く御礼を申し上げます。

思い起こせば、同窓会・学校・PTAの三者が中心となり、創立百周年記念事業協賛会を立ち上げたのが令和3年11月でした。以来約2年にわたり新型コロナウイルス感染症はなかなか終息せず、記念式典も予定通り開催できるのかといった不安を抱きつつ、学校では中止や規模縮小も視野に入れたが準備を進めてきました(実際に複数の案が検討されていきました)。その後昨年5月になつて、ようやく新型コロナウイルスは感染法上「5類」に引き下げられたわけですが、感染爆発の懸念は拭えず手探りで対応が続き、記念式典を予定通り実施すると決めたのは何と開催の3か月前、夏休みに入る直前、まさに瀬戸際の判断でした。その後は「コロナ禍明け」という未曾有の困難の中、できることとできないことを精査した上で、担当を中心に急拵えで本格的な準備を始めることになったのです。今思うと内容的には多少にわか仕立ての部分もありましたが、全校集会や学年集会を有効に活用するなど創意工夫を凝らし、最終的には「在校生・教職員の熱意や意欲、協力に支えられながら」何とか成功裏に終えることができたというのが正直なところです。「禍を転じて福となす」。まさに式典の開催は「八高の学校力」を一段階高め、加えて同窓生の皆様を含めた「チーム八高」を有効に機能させることができたのではと改めて評価しています。

最後に、同窓会とは同じ窓の集まりです。時代は違っても、人生で最も多感な青春時代に同じ窓から同じ景色を眺めていた仲間です。皆様方には、創立百周年記念事業をきっかけに、『オール八高』で一丸となり、引き続き母校を温かく見守っていただき、後輩達の活躍にエールを送っていただき、ますますようお願い申し上げます。本校生徒・教職員は一丸となって、百年余の長きに渡り積み重ねられてきた伝統を引き継ぐとともに、未来に向かって更なる発展を遂げることでありますように今後とも尽力してまいります。

さて、近年では新型コロナウイルスの感染拡大により、生活、働き方のスタイルが大きく変わりました。学校においても感染拡大時は、子ども達にとつて当たり前のように行われてきた学校祭や部活動の大会、見学旅行や体育大会等が軒並み中止となり、大変辛い思いをさせてしまった期間でありました。父母と教師

の会の活動においても思うような活動が行えず、大変歯痒い思いもありました。さらに、新たな生活様式に合わせて学校行事の見直しが必要であることになり、それは父母と教師の会の活動におきましても例外ではなく、今後より一層変化が求められることになると思います。しかしながら、私たちが行っている活動は、子どもたちが希望に満ち溢れた将来への夢の実現のために、保護者と学校が協力し合いながら支えていくことで、子どもたちにとって必要不可欠なものであると考えております。また、これからの八雲高等学校が長きにわたり発展していくためには、今後も引き続き同窓会の皆様や地域の方々との連携を深めて参りたいと思っております。私たち父母と教師の会も、新たな気持ちで時代の変化と向き合いながら、次の百年へと尽力して参りますので、これからもご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。



最後にになりましたが、皆様のご健勝とご多幸を祈念し、結びといたします。

次の百年に向けて



父母と教師の会 会長
小熊 裕樹

同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、この度の創立百周年記念式典・祝賀会を無事に終えることができました。皆様におかれましては、格別のご高誼とご協力をいただき、父母と教師の会を代表いたしまして、心よりお礼申し上げます。

北海道八雲高等学校は、大正十二年に庁立八雲中学校として設立され幾度となく改称、統合と繰り返され、今年度で百周年を迎えることができました。特に、記念式典並びに祝賀会には多くの皆様のご尽力により盛大に開催され、出席した私自身も大変感銘を受けました。これもひとえに、大正、昭和、平成、令和と激動の歴史の渦中で、この長き歴史と伝統を守り抜いてきた諸先輩、教職員の皆様、保護者、地域の方々の支えがあつてこそと、心より感謝と敬意の意を表する次第であります。

さて、近年では新型コロナウイルスの感染拡大により、生活、働き方のスタイルが大きく変わりました。学校においても感染拡大時は、子ども達にとつて当たり前のように行われてきた学校祭や部活動の大会、見学旅行や体育大会等が軒並み中止となり、大変辛い思いをさせてしまった期間でありました。父母と教師

の会の活動においても思うような活動が行えず、大変歯痒い思いもありました。さらに、新たな生活様式に合わせて学校行事の見直しが必要であることになり、それは父母と教師の会の活動におきましても例外ではなく、今後より一層変化が求められることになると思います。しかしながら、私たちが行っている活動は、子どもたちが希望に満ち溢れた将来への夢の実現のために、保護者と学校が協力し合いながら支えていくことで、子どもたちにとって必要不可欠なものであると考えております。また、これからの八雲高等学校が長きにわたり発展していくためには、今後も引き続き同窓会の皆様や地域の方々との連携を深めて参りたいと思っております。私たち父母と教師の会も、新たな気持ちで時代の変化と向き合いながら、次の百年へと尽力して参りますので、これからもご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

母校に感謝



総務部長（第20期）

岡 島 省 一

同窓会に携わって3度目の周年行事となりました。大きな節目となる百周年記念事業を成功させるため、菅原前校長・小林会長をはじめPTA・学校当局・教職員・同窓会の皆さんのご協力をいただき、3年前より準備して参りました。

スター・記念碑碑文・記念讃歌歌詞を募集したところ、ポスター（記念讃歌CDカバーにも利用）は美術部員が、碑文・讃歌作詞・讃歌作曲は同窓生の作品を採用しました。全てが素晴らしい百周年に相応しい、新しい時代に思いを抱かせる出来栄でした。

百周年記念事業で予算規模も大きくなると想定し、学校との打ち合わせ、役員会、全体会を開催した中で、財務部を設置し総務・事業・行事・財務の4部体制で総予算3300万円の事業を決定しました。

総務部としては、各事業実施に伴う打ち合わせ、連絡調整、部外との渉外関係を受け持ちました。特に事業計画に伴う予算編成と協賛金の募金方法について悩んでいたところ、第三期生の佐藤功祐氏より協賛の申し出がありました。胸をなでおろすと共に、全国の同窓生・諸先輩より協賛を得ましたことは「伝統校ここにあり」を改めて実感しました。予算計画が進み、更に八雲町より百周年記念事業に対して補助をいただけたことが事業達成の大きな要因でした。

百周年記念と生徒の姿



事業部長（第19期）

小 林 石 男

北海道八雲高等学校創立100周年記念事業を盛会裡のうちに終了することができました。これもひとえに御賛同、御協力いただいた同窓生、地元企業、歴代学校職員、PTA会員、各団体、個人等皆様方のご支援あればこそと深く感謝御礼申し上げます。

3年前八雲高等学校創立百周年事業協賛会を学校教職員の皆様と共に立ち上げ準備を進めてまいりました。

関係者、生徒との記念撮影、質疑応答など、この度の講演で生徒皆さんにとって心に残るお話を伺うことができたのではないのでしょうか。講演一連の経験が今後の学生生活に生かされる事と思います。

これから大きく社会構造の変化が予測される次世代を担う郷土八雲を誇りに思う生徒諸君にエールをおくりします。式典会場では「こんにちには、こ

創立100周年式典・

祝賀会を終えて



財務部長（第27期）

山 形 まり子

八雲高校創立百周年記念式典、祝賀会が、十月十五日に多数の皆様出席を頂き盛大に挙行されました。

八雲高校創立百周年事業の財務部長の大役を仰せつかりながら私的の所用が発生し、大半は副部長の山田耕三さんにお願

願っています。財務部としての責任は大きいですが、名ばかりの部長でしたが山田副部長さん、岩崎事務長さん、事務官の竹中みどりさん、佐藤渉さん他関係の皆様

温かいサポートと協力に支えられて、この日を迎えることができました。これからも八雲高校へのご支援、ご協力をお願い申し上げます。



100周年案内看板



記念讃歌CDと記念誌

創立百周年記念式典

・祝賀会を終えて



行事部長（第27期）

伊 藤 整 志

爽やかに晴れ渡った十月十五日の佳き日に、北海道八雲高等学校創立百周年記念式典及び記念祝賀会が開催されました。

式典に先立ち、特別功労者で大阪よりお見えの佐藤功祐様、名誉顧問の徳川義嵩様を始めとして来賓や同窓生立会いの下、記念碑の除幕式が行われました。

参加された皆さんの途中和やかに歓談されている姿を見てみると、ほぼ成功だったのかなと感じました。

私の出番は、祝賀会の進行なので粛々とスケジュールが進む中、夜の出席まで英気を養っていました。

窓会に誘われて、気が付けばいつの間にか母校も百周年に...

最後は、お決まりの町長出陣の八雲高校歌斉唱で盛り上がりしました。



校舎入り口の学校案内看板



百周年ポスター

若い頃に同

八雲高等学校百周年を通過点として、更なる飛躍を祈念します。

はばたけ未来へ！

創立百周年記念講演会「人とつながる」

講師 小平 奈緒氏

「さわやかなトークで会場を魅了した小平奈緒さん」

総務部(第27期)

長野 喜美子



「八雲高校の講演は、北海道で初めての講演なんです。百周年記念にお話しさせていただけるのは光栄です。是非引き受けたいと思います。」とメールで快諾をいただいていた。

この記念講演は、未来ある八雲高校の在校生に、これからの人生に夢と希望を膨らませてもらうと記念協賛会で企画したものです。高校の方では、当日の動きなど、百周年の記念事業を直接担当する事務局の三木先生と工藤先生が中心となり、念入りの準備をしてくださいました。特に当日は、三木先生が役員と一緒に11時には会場に来てくださり、照明や音量調整、会場の配置など、講演が終わるまで全体把握を一手に引き受けてくださいました。

令和5年9月11日月曜日、当日は快晴でさわやかな風が吹くいい日となりました。

振り返れば、昨年3月、役員会で記念講演の講師に誰がいいか話していた時に、事業部の福田浩子(北海道新聞の通信員)さんの「小平奈緒さんのお話いいですよー」という一言がこの講演のきっかけとなりました。ほかの役員さんも「良いね!」の声が出て、会長さんから「是非申し込んでください」ということで、申込作業に入りました。タイミングよく、その直後に「鶴瓶の家族に乾杯」

演された小平奈緒さん。すでに現役引退されていた時で、全国から講演依頼が殺到していることも話していました。八雲高校の生徒の皆さんに、奈緒さんが講演してくれたらどんなにいいだろうと思っただけでした。

講師をされる小平奈緒さんは、マネージャーさんの森山勝心さんとともに、前日に長野県松本市から函館市入りし「今函館で夕食に海鮮を食っています!」との連絡あり。当日は、函館からJRで八雲駅へ。その後タクシードで無事に会場に着。みんなでお迎えしました。

また、今回の百周年記念講演は、役員会で、高校生だけではなく同窓生を含む八雲町民の方々などにも一緒に講演を聴いて頂きたいと考えました。八雲町広報に案内チラシを入れ、商工会事務所においてほしい、希望される方に財務部長の山形さんが中心になり整理券を配布してくださいました。



「人とのつながりを大切に」

生徒会長 新田 芽衣

北海道八雲高等学校の記念すべき創立100周年記念事業として、記念講演会が行われました。

当日は、八雲高校の在校生、教職員、協賛会役員、そして町民の皆さんで一杯になった会場で、皆さんが小平奈緒さんの笑顔で紡ぎ出すアスリートならではの話を和やかに、真剣に聞き入る姿が印象的でした。ここまで来ることができたのは、関係各所調整役の幹事長の岡島さんや会場全体に気配りされた三木先生を筆頭に、名司会の伊藤整志さんをはじめとする同窓会の役員さん、八雲高校の工藤先生はじめ教職員の方々の熱い連携の集大成と感謝しています。

「人とつながる」という奈緒さんのメッセージが、高校生の皆さんや関わったすべての方々の心に深く刻まれ、百周年の思い出の一つになりますように祈念しています。



北海道八雲高等学校の記念すべき創立100周年記念事業として、記念講演会が行われました。

「人とのつながりを大切に」

小平さんは「人」とつながることを演題として、スピードスケート人生での出来事や引退後はどのような活動をしているのか、自身の大学入試の失敗談などをお話してくださいました。



「人とのつながりを大切に」

小平さんは「人」とつながることを演題として、スピードスケート人生での出来事や引退後はどのような活動をしているのか、自身の大学入試の失敗談などをお話してくださいました。

今回の講演会を通して、目標を達成するためには、必要なのは「人とのつながり」だということを知り、私達自身の将来にも関わることでと考えると、考えさせられました。

小平さんには、貴重なお話をいただき、とても感謝しています。

創立百周年記念 石碑除幕式

第3期 佐藤 功 祐

私は、昭和二十六年度の卒業生で佐藤功祐と申します。現在は大阪在住でございます。

まずは、今回の八雲高等学校創立百周年記念式典に対しまして、誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げますと共に、一言御挨拶申し上げます。

また、この度は百周年記念式典を挙げるにあたり、お力添えを賜りました御来賓の皆様並びに関係各位に、深く感謝し、お礼申し上げます。

さて私事でございますが、冒頭に申し上げますように、私は八雲高校の第三期生でございます。

その当時の日本では、政治・経済・文化・情報・人物 全てが大都市に集中し、自分の志を貫く情熱を満たすためには、その大都市に身を置くことが、至極当然の事と思ひ、私は、この八雲高校を卒業後、関東の大学に進学し商業の地大阪への道を歩んで参りました。

しかしそれから約八十年が経った今、世の中は大きく様変わりし高度情報化の波が押し寄せ、何処に居ようとも情報は意のままに得る事が出来、欲しい物は直ぐにでも手に入れる事が出来、表現したいことは何処からでも発信する事が可能な時代となりました。

この様な時代背景であれば、東京や大阪などに固執する事も無く、この北海道の地で志を実現する可能性も大きく膨ら

できているのではないのでしょうか。

高度情報化、グローバル化に拍車がかかる社会の中でめまぐるしいスピードで情報が飛び交い、社会・文化・経済はいとも簡単に国境を越える時代となりました、このような状況であるからこそ「生きる力」「生き抜く力」「新しい時代に順応できる柔軟な発想力」をしっかりと身につけ、志を叶えるべく駆け巡る事が必要となってくるのではないのでしょうか。

現在の日本は厳しい経済状況にあり、将来が大変懸念される状況となっています。

少子高齢化の進展は、好むと好まざるに関わらず、私たちの社会や家庭環境に大きな影響を与え、私たちはさまざまな課題に直面しています。

しかし、時代が変わっても変わることの無いものは「志」であり「情熱」を持ち続ける事の大切さであり、この部分は今も昔も不変の物と考えております。

今までに申し上げました内容が、見事に今回の石碑

の文言に表現されており、感服した次第でございます。

最後になりましたが、八雲高等学校がこの八雲の地に今以上に根付き、北海道を代表する教育機関として、発展を遂げることを心より願ひ、創立百周年の節目にあたり、これまでのよき伝統を踏襲しつつ、これからの新しい時代にあった特色ある学校となります事を願ひ、今回の御挨拶に代えさせていただきます。

本日は誠に有難うございました。





学校長式辞

100周年記念 式典の様子



式典開始前の会場



協賛会長挨拶



道教委の方の祝辞



生徒会長のことば



現ピア・サポートリーダー大内さんの抱負



澤田さんの発表



卒業生の近藤さんからピア・サポート活動報告



校歌演奏 吹奏楽局



生徒の様子



小林協賛会長の挨拶

祝賀会の様子



佐藤功祐さんの挨拶



感謝状授与 第27代校長 飯森先生



町長(元、八高最後の応援団員)のエール



祝杯の挨拶 土井教育長さん



徳川名誉会長さんの祝辞



アトラクション 八雲エキストラウインズ



スピーチをいただいた谷口札幌支部長さん



17期代表でスピーチする川口さん



会長への感謝状授与

今も健在 各期の心

八雲高校の歴史を顧みて

第6期生 昭和二十九年卒

首藤 宜子



晩秋の10月15日、好天に恵まれて八雲高等学校創立百周年の大きな節目を迎え、記念式典、並びに祝賀会が盛大に開催されました。

式典に先がけて校舎前庭に建立された記念の石碑除幕式が厳粛に執り行われ、徳川義崇様をお迎えして岩村町長、石碑を寄贈された3期生の佐藤様他関係各位の方々が見守る中石碑に刻まれた「情熱百年羽ばたけ未来へ」の碑文が披露されました。私達6期生6人も列席し、遠く大阪や札幌、函館から式典に参列致しました。校舎は変わりまじく遊楽部岳を迎えながら母校の前で記念撮影、懐かしさをかみ締める一時でした。

われらここに集いて

第17期生 昭和四十年卒

悦子 旧姓小坂



最近家事をするときは八雲高校百周年記念讃歌「風の記憶」がBGMとなる。タイトルもさわやかで、聴くほどに美しく良い曲と思う。ところどころに現校歌のメロディが入れられているのも効果的で、作詞の鈴木優伽さん、作曲の白岩先生に拍手を送りたい。

CDの終わりに混声合唱で校歌が流れると歌わずにはいられない。そして式典の際、最後に全員で声を張り上げて歌ったこと、壇上では赤いハチマキに白手袋の岩村町長が渾身のエールを送った姿が甦る。

60年も昔、生徒だった頃は詞の意味を深く考えもせずただ声を合わせていただけだったが、年を重ねて改めて聴くとこれもまた名曲であり、作詞風巻景次郎、作曲筒井秀武両先生のかつての熱情を思う。

式典は厳かに物故者追悼が始まった。私は三月末に急逝したK枝の笑顔の想い、またコロナ禍中にひっそりと逝かれた、私が子供の頃隣人でもあった山本丞先生を想いながら先人の冥福を祈った。遠く名古屋からは八雲開町元祖、徳川家の御子孫徳川義崇氏、大阪からは多額の寄進をされた佐藤功祐氏の出席も仰ぎ、しゅくしゅくと、心に響く式典であった。

祝賀会も盛会で同期17名をはじめ、多数の懐かしい温顔に会えた。来賓の松永正実氏が「朝の食卓」を楽しみに読んでいたので、今回お会いできたことも光栄であった。そのあと、同期会は深夜まで、翌日も午後のJ.R札幌行時刻ギリギリまで楽しい二日間を過ごす。

多勢の出席者とともに母校での百年記念を元気に祝えたことは幸せであった。これらひとえに協賛会会長小林信雄さんを中心に、各部担当者が三年にわたる準備を経て惜しまなく力を発揮された賜物である。皆様ありがとうございます。

八雲に関する人物やニュース記事はほとんど切り抜いて、今では墓参のときぐらいいしか足を運ばなくなった故郷に思いを馳せる。完成はいつになるのか、かの隈研吾氏が監修するという役場新庁舎「J.R」が発表された新幹線の仮称新八雲駅舎の近辺は牧場色に染まるらしい。健康を願い、また友人達と連れ立って見に行きたいものである。

八雲高校創立百周年にあたり想うこと

第46期生 平成6年卒

川岸 直樹



卒業生ならびに在校生の皆様、創立100周年おめでとうございます。日々、忙

しく過ごされてるとは思いますがいかがでしょうか。

近年はコロナ感染症に振り回され、日本はもとより世界中がおかしくなっています。自然災害や戦争：ずっと平和で当たり前だと思いつつあり、いろんな対応に備えておかなきゃならない世の中で『変化』している途中なんではないでしょうか。

私の学年は、まさにいろんな『変化』があった年月でした。今では当たり前になっている高

校入試の面接試験が始まった初年度の生徒でした。面接官役をやっている先生達も手探り状態で：みんなと一緒に創り上げていった記憶があります。バブル崩壊後のあおりもあり、湾岸戦争：昭和から平成へ：けっして安泰な状態ではありませんでした。そんな中で高校入学となりました。

2年生の時には「北海道南西沖地震」の発生。丁度、1学期の期末テストの期間中でした。就職氷河期と呼ばれ始まったのも私達の高校時代でした。

学生時代の思い出といえど、勉強は全くやらす：毎日バレーボールと下手くそなギターのやっていたこと。周りの事も考えず、今思えば、すっごい無駄な時間の使い方をしていました。でも、好きなことを続けていけた事：その時間を与えてくれた母には感謝しています。

私はひとり親家庭でした。料理が好きだったので、家族の食事は色々作りました。この経験が今の職業「調理師」に繋がったと思います。

1クラスあたり40名強で普通科3クラス、商業科2クラス、黒岩から栄浜までの同級生約200名が3年間を過ごしました。今の在校生よりも多い人数です。

小学校・中学校よりも、八雲全地域から集まった高校の『仲間』は今でも大切な『仲間』です。

携帯電話やスマートフォンもなく、PCも今のようない機能もなく、24日のコンビニではないし、今の時代からすれば：：かなり不便な環境でしたが、何も無くとも色々と考えて行動して楽しんだ時間を共有していました。（放課後の校内本気の鬼ごっこは楽し

かった）

私は今 フードアドバイザー 兼フリーランスの調理師をやっているが事務所に開放して、F.F.F. シンモというコミュニティスペースを提供しています。

自分の経験を活かして、町民の困りごとや相談を受け子育て家庭ひとり親家庭などの手助けできるきっかけ作りをしています。

熊石地区と合わせて14000人位の八雲町。だんだんと人口が減少してありますが：今いる町民が少しでも協力して楽しく暮らせるように、微力ながら活動していきたいと思っています。

調理師として、『美味い食材の宝庫 八雲町』の発信。季節の食べ物を提供できる場所を作りたいと目標を立てています。子育てのサポートや地域のサポートにも、これ以上の努力もしていきますので、皆さんの協力とご理解の程お願いしたいと思っています。

創立百周年、そして未来へ

第54期生 平成14年卒

藤田 真也



創立百周年記念式典及び祝賀会が昨年十月十五日に盛大に開催され、久しぶりに母校へ行った私は当時の様々な懐かしい思い出がよみがえってきました。

当日、式典会場内を見てみると私と同年代の姿が少なくというよりはほとんど何故か緊張して参りました。そんな中、式典が終わる在校生による部活動や課外活動の紹介をまとめた素晴らしい動画を披露していただきました。

その視聴していた中でも、やはり私の目に焼き付いていた場面は在学中三年間所属しておりました山岳部の現役部員たちが頑張った瞬間、喜びと感動とともに涙がにじみでてきました。

「登るも人生、下るも人生、人生山登り」と当時指導してくださいました大島一展監督の合言葉が胸に日々部活に没頭していた頃が懐かしく思い出しました。

出しました。

この合言葉の意味とは、テレビ時代劇の水戸黄門の主題歌の歌詞を山登りに例えた言葉であります。

あの時の瞬間を思い出してみても決して楽な三年間ではありませんでした。今こころ、山岳部が存続し活動していることがOBの私にとって最大の励みで御座います。

祝賀会で現職員の先生方に山岳部の現状を聞いてみたところ、次年度三年生になる生徒以外の部員がいないとの事で廃部の危機に陥るかもしれないと伺い衝撃を受けました。

四年前、新型コロナウイルス感染症の蔓延により行動制限がかりこれからどうやって生活をしていくか模索していたあの時を思い返すと、昨年五月にもあり通常開催に近い形で式典祝賀会が挙行でき出席出来た事は本当に嬉しかったです。

この苦難の中、百周年という大きな節目とともに各記念事業の舵を取ってご尽力されました小林会長他運営に携わった方々の功績は八高の歴史に大きな財産になること、次世代へつなぐ架け橋になることに違いないと思います。

文頭でも言いましたが、中年層の同窓会への協力が少なく見られますが今後は町内在住者を中心に来る百周年に向けて運営メンバー増員を目標として微力ではございますが私もサポートして行きたいと思っています。

最後に、生徒たちの益々のご活躍と八高の発展、そして同窓生皆様のご健勝とご多幸を祈念致します。

百周年に参加して

第57期生 平成17年卒

佐藤 佑樹



この度、創立百周年記念式典及び祝賀会に参加させていただきます。今回参加させていただきますにあたり、先ず初めに百周年という記念すべきタイミングで参加できたことを嬉しく思います。周年事業には初めて参加しました

が、残念ながら同世代の方々はおりませんでした。祝賀会の席では様々な世代の方々と交流させていただき、今まで知らなかったような歴史等も聞かせていただき楽しく参加させていただきました。

また、八雲にUターンしたばかりの頃に様々な事業等でお世話になった歴代の校長・教頭先生にもお会いすることができ、久々の再開にも関わらず憶えてくださっており大変有意義な時間となりました。

私が高校生だったころにはまさか母校の百周年に八雲に居て式典や祝賀会に参加することがになると考えもしませんでした。色々なことが戻ってきた頃から色々なことが関わらせていただいております。今回お声掛けいただき参加させていただいたことにもご縁を感じております。

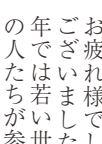
個人的なことではあります。現在、学校評議委員を務めさせていただいており、また経営しているカフェの方は学校祭などで関わらせていただくなど、様々なかたちでお世話になっております。これから先も末永く母校が続くよう微力ながら協力させていただきます。そして百周年の際には、またお声掛けいただけるよう日々の活動に励みます。

最後にはありますが、今回、百周年記念事業にあたりご多忙な中企画、運営された方々には感謝しております。大変お疲れ様でした。ありがとうございました。そして次の周年では若い世代などより多くの人たちが参加してくれることを願っております。

形違えどこの地に残り続ける

第72期生 令和2年卒

鈴木 優伽



「八雲高校百周年記念合唱曲作詞募集」のポスターを見かけたのは、大学1年の秋頃でした。八雲高校を卒業し、県外の大学に進学したものの、コロナ禍で授業は

全てオンライン。思い描いていた大学生活を送れず、一度八雲へ帰ってきた時でした。作詞の経験はありませんでしたが、両親や作曲者である白岩優拓先生の強い勧めもあって応募いたしました。

さて、今回作詞させていただいた百周年記念合唱曲「風の記憶」の歌詞には、八雲らしさ、八雲高校らしさを散りばめられました。現在八雲高校へ通っている方だけでなく、あらゆる場所で活躍されている卒業生の皆様、そしてこれから入学してくる未来の八高生にも、時代を超えて共感していただけたら幸いです。ぜひ「風の記憶」を聴いて、歌詞や曲を見つけてみてください。



私は4月から社会人になります。八雲高校を卒業し、八雲の地を離れて5年目になりました。が、未だに八雲高校で過ごしたひとときを夢に見ることがあります。八雲高校での青春は楽しかったことだけではありませんでしたが、そういった思い出も含めて自分の糧になっていると実感しています。学校祭や修学旅行などのイベントはもちろん、普段の何気ない日常も振り返るととても価値のあるものでした。この度、恐縮ながら100周年記念式典に参加させていただきます。歴史の重みを実感するとともに、八雲高校は多くの方に支えられ、そして多くの方を支えてきた場所であるとも感じました。在学中はあまり気づいていませんでしたが、不由自主に当り前のようには高校へ通っていたのは先生方地域の皆様、そして卒業生の皆様などに見守られていたからだと思います。同時に、町にとつては未来の担い手として、卒業生にとっては八雲高校という存在が支えになっていく人ではないでしょうか。この先も八雲高校が多くの人に愛され、ますます発展していくことを祈念しております。

創立百周年記念事業のご報告

同窓生の皆様、関係各位のご支援により、計画しておりました記念事業は以下のとおり実施することが出来ました、心よりお礼申し上げます。

◎百周年周知用ポスターはデザインを美術部に依頼し、未来へはばたく様子がイメージされ、製作は卒業生に発注して町内140か所に掲出しました。周知用看板は、町内国道5号沿に3か所設置し、学校入口の校名看板を改修しました。

◎記念讃歌の作曲は58期の白岩優拓さんに依頼済みでした。詞については在校生・同窓生を中心に広く公募したところ、72期の鈴木優伽さんの詞を採用しました。「青春の輝き・母校への想い」に満ちた素晴らしい讃歌となりました。CDは記念誌とともに配布しましたが、事務局で在庫保管しております。

◎記念石碑は3期の佐藤功祐氏より寄贈されました。碑文は公募により14期の松橋幸生氏による「情熱100年、はばたけ未来へ」を採用し、設置した生徒玄関近くで、生徒たちを見守り、励ましています。

併せて、設置場所の前庭樹木の剪定を行いました。

◎校史資料館は築30年が経過し外壁・屋根・内装工事を行いました。

◎さらんべ会館は進路学習や遠方生徒の宿泊施設としての役割を終え、部活動用トレーニングルームとして利用していますが、屋根等の修繕が必要となり、修理しました。

◎記念誌・記念会報紙。記念誌については完成し、協賛された方・生徒・教職員、式典参加者に記念讃歌CDと共に配布済みです。記念会報紙は、今回作成し前者の他、各支部、町内公的機関等に配付します。

◎部活動補助について、野球部にピッチングマシンを贈りました。

◎百周年記念講演会は9月11日、スピードスケート金メダリスト「小平奈緒」さんをお招きして「人とつながる」と題して、生徒・町民皆さんを対象に開催しました。

◎人材育成プログラム(生徒を毎年海外短期留学)は、令和6年度より当初計画の10年間を(予算の都合により)短縮し、4年間を目途に学校と検討中です。

◎八雲高等学校創立百周年記念事業協賛会は3月中旬に総会を開催し、事業報告・収支決算について審議して全ての事業が終了します。

同窓生をはじめ、ご協賛くださった皆様に心よりお礼申し上げます。今後も八雲高等学校・生徒に、ご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



創立 100 周年記念協賛会事業部

創立100周年記念誌 正誤表

創立100周年記念誌に下記の誤り及び追加事項がありました。
お詫び申し上げますとともに、訂正いただきますようお願い致します。
令和6年2月吉日

ページ	位置	誤	正
6	寄付者／第3期生	佐 藤 功 佐	佐 藤 功 祐
7	校史記念資料館	創立80周年	創立70周年
151	上から1段目	相 澤 健 一	相 澤 正 徳 (故相澤健一氏ご子息)
151	上から3段目	岩 崎 久二夫	岩 崎 久仁夫
151	下から2段目	小 澤 二 郎	小 澤 二 朗
152	上から1段目	菊 地 正 次	菊 地 政 次
152	下から3段目	須 崎 広	須 崎 広
153	上から2段目	原 田 峰 生	原 田 峯 生

■賛助者ご芳名一覧（追加） 順不同・敬称略 令和6年2月2日現在
赤 井 義 範・木 村 幸 治・須藤（北嶋）晴美

■募金企業一覧（追加）
（有）土田塗装

木彫り熊が見直されています。
八雲町は木彫り熊の発祥の地です。令和6年に誕生100周年を迎えました。



（長野）

この度、創立百周年記念会報第42号を皆様にお届けすることができました。

この記念会報の発行を持ちまして、ほぼすべての予定されていた百周年記念事業を終了することになります。会報42号作成に関わり、快く執筆いただいた皆様、貴重な記録写真を提供くださいました皆様には、心よりお礼申し上げます。

母校、八雲高校の歴史は、今後もし一日一日と刻まれ、令和6年は創立百一年となり、また次に進んでいきます。

「情熱百年―はばたけ未来へ―」「人とつながる」のキーワードを大切にしながら、飛躍を続ける母校と同窓生の皆様との絆がこの記念会報を通してさらに深まり、つながり合うことを心より祈念しております。

令和4年度 八雲高等学校教育振興会決算報告書			令和2年度 八雲町補助金内訳		
収入の部			収入の部		
科 目	金 額	備 考	科 目	金 額	備 考
繰 越 金	163,614		八雲町より補助金	5,241,864	
会 費 収 入	0	総会が無かった為	合 計	5,241,864	
そ の 他	0		支出の部		
合 計	163,614		科 目	金 額	備 考
支出の部			通 学 費 助 成	4,616,079	長万部1 森3 熊石8 石倉4 落部18 野田生13
科 目	金 額	備 考	進 路 指 導	217,385	ベネッセ模試 スタディサプリ(通信教育)
助 成 金	105,600	補助教材支援	各 種 検 定 助 成	408,400	珠算・電卓実務 全 商簿記 英検 漢検 数検 情報処理
そ の 他	0		合 計	5,241,864	
合 計	105,600				

収入163,614－支出 105,600＝繰越金58014

郵便振替口座名 北海道八雲高等学校教育振興会 口座番号 02780-0-108941



八雲高の生徒確保に向け設立された支援組織「八雲高教育振興会」の設立総会

同日町内で開いた設立総会には、同窓会、地元住民、学校関係者ら17人が出席。会長に同窓会長の岡田俊之さん、顧問に川代義夫町長が就き、岡田会長が「地域の学校は子どもが少なく、八雲高は町の発展のためにも不可欠な存在。町外からも生徒が集まる魅力ある高校づくりに向け全町の議論する場としたい」とあいさつした。

同会では、高校生の検定料や、下宿代補助のことも確認した。出席者からは、「子どもが八雲高に入学したくなるような有効な対策を考えてほしい」、「障害児を受け入れる特別支援コースを八雲高につくれないか」などの意見も出た。

2012年度の八雲高の定員は普通科120人、総合ビジネス科40人。少子化や町外の高校への生徒流出増加で、本年度入学者数は普通科81人、総合ビジネス科15人。町内では熊石高の14年度の募集停止が決まっている。

生徒数減の八雲高

住民ら支援組織設立

下宿代補助など検討

【八雲】少子化などで生徒数が減少している八雲高（高村直克校長、319人）を支援しようと、同窓会有志や地元住民らが「八雲高教育振興会」を24日設立した。振興会は今後、同校の教育環境の充実や部活動を支援するなど、地域を挙げて生徒数確保の方策を探る。

（森奈津子）

平成 24 年 8 月 28 日（火）北海道新聞

八雲高等学校教育振興会から報告とお願い

八雲高等学校教育振興会会長 小林 信雄

八雲高等学校教育振興会は同窓会が主体となり平成24年に設立しました。

目的は、八雲高校生徒への教育支援・教育環境の向上と、保護者の負担軽減を図るため、八雲町から財政支援をいただいて次の補助事業を行っています。

◎通学費の半額補助

◎模擬試験受験料の半額補助

◎準2級以上の各種検定料の半額補助

◎遠方通学者に対する下宿代補助

（実質的な事務は学校事務方をお願いしています）

令和4年度の補助金額は524万円でした。内訳は通学費461万円、模擬試験22万円、各種検定41万円となっております。その他に、独自補助として英語補助教材購入支援として10万円を支出しております。

少子化が進む中、教育環境を向上させ、八雲高校入学のメリットを町内外にアピールすることで在校生の減少を防いでまいります。現・在校生は207名です。

補助事業を継続する為、教育振興会維持の為、振興会運営費（事務・通信費）のご支援をお願いする次第です。会費は一口千円です。口座名等は決算報告の下部に記載しております。よろしく願いいたします。（事務局・岡島）

編集後記

この度、創立百周年記念会報第42号を皆様にお届けすることができました。

この記念会報の発行を持ちまして、ほぼすべての予定されていた百周年記念事業を終了することになります。会報42号作成に関わり、快く執筆いただいた皆様、貴重な記録写真を提供くださいました皆様には、心よりお礼申し上げます。

母校、八雲高校の歴史は、今後もし一日一日と刻まれ、令和6年は創立百一年となり、また次に進んでいきます。

「情熱百年―はばたけ未来へ―」「人とつながる」のキーワードを大切にしながら、飛躍を続ける母校と同窓生の皆様との絆がこの記念会報を通してさらに深まり、つながり合うことを心より祈念しております。